

(国語)

情報を読み解きながら、自分の考えを形成していく力（言語リテラシー）の育成をめざして

～国語科における「書くこと」を中心に～

大阪市立阪南小学校 学力向上部

1. 研究主題設定の理由

全国学力・学習状況調査や学力経年調査の結果を見ると、本校の児童は、国語科「書くこと」の領域の正答率は「話す・聞くこと」「読むこと」の領域に比べると低く、特に自分の考えを形成し、それを書くことが十分できていないことが分かった。

そこで、情報を読み解きながら、自分の考えを形成していく力を「言語リテラシー」と定義し、研究主題を「情報を読み解きながら、自分の考えを形成していく力（言語リテラシー）の育成をめざして～国語科における「書くこと」を中心に～」をテーマとして研究を行うこととした。そして、本研究では、児童が自分の考えを深め、書くことにつなげていく学びのあり方を明らかにすることをめざした。

2. 研究の趣旨

急速に情報化が進展する社会において、様々な媒体の中から必要な情報を取り出したり、情報同士の関係を分かりやすく整理したり、発信したい情報を様々な手段で表現したりすることが求められている。

表現には様々な種類があるが、書くという行為は、ものの見方や考え方を確かにして、相互理解を深めたり広げたりするうえで、きわめて重要なはたらきをもっている。話すという行為も同じことが言えるが、文字として記したものはいつまでも残るという特質をもっている。そのため、話すこと以上に相手意識・目的意識・方法意識が強く働き、言葉の使い方や文章の内容・構成について、思考力・判断力・表現力が求められる。

そこで、国語科における「書くこと」に焦点を当て、新学習指導要領で示されている「書くこと」の学習過程を踏まえた授業づくりをしていく。まず、児童が継続的に追及・解決したいと思う課題を把握し、一人一人が自分の考えを形成する。次に、考えたことや書いたことをより確かなものや価値あるものにしていくために推敲・共有していく。そのような学習過程を通して、児童の思考力・判断力・表現力が高まり、書くものが量的にも質的にも変化していくことが期待できる。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点① 年間指導計画・単元指導計画の作成、付けたい力の明確化

国語科における言語活動の充実を図るためには、どのような力を付けたいのかを明確にした上で、それにふさわしい言語活動が位置付けられていることが大切である。この言語活動の位置付けにより、児童が一貫して目的や相手を明確に意識して学習指導を進めることができるようにする。

また、「書くこと」の言語活動と「話すこと、聞くこと」「読むこと」の領域の言語活動とを関連付けることにより、効果的な指導を図る。

視点② 自分の考えを形成していくための指導の手立てを工夫

書くものが充実したものになるためには、児童一人一人が目的意識・相手意識と明確な自分の考えをもちながら書くことが大切である。そのためには、題材の設定、情報の収集、内容・構成の検討といった書くに至るまでの過程を重視し、以下のような学習過程を踏まえていく。

- 児童の興味・関心を生かした学習課題を設定する。
- 題材の設定、情報の収集、内容・構成の学習過程を工夫する。
- 推敲、共有の学習過程を通して考えを広げ、まとめる。

視点③ 他教科の学習や学校生活の場における書く機会の充実

各教科の学習や学校生活では、「書く」という活動は日常的に行われ、書く力をさらに高めることができる。国語科で培った書く力が他教科の学習や学校生活でも活用され、広がっていくことで、書くことへの意欲がさらに高まると考える。

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- 児童は自分で調べたことや読み取ったことを整理しながら、自分の思いや考えを書いて表現しようとし、以前よりも書くものが量的にも質的にも高まった。また、読むことと書くことを関連付けた言語活動にも取り組んだことで、物語文や説明文の内容や構成、登場人物の心情、作品のよさや工夫を読み取る力も高まった。
- 児童が目的意識や相手意識、自分の考えをもって意欲的に取り組むことができた。特に、指導者が言語活動で児童に書かせたいモデル文を示したことについては、児童の興味・関心を高めるだけでなく、これまで書くことにつまずきが見られた児童にとって、「どのように書いていけばよいのか」という手立てになり、高い有効性が見られた。
- 自分の考えを書いて表し、それを友だちから認めてもらったことで、達成感や喜びを味わうことができた。また、他教科の学習でも書くことで自分の考えを明らかにしたり、書いたものをもとに友だちに説明したりすることができた。さらに、友だちが書いたものに対する興味・関心が高まり、他教科の学習や学校生活の場でも互いに書いたものを見合い、友だちのよい表現を自分の考えに生かすことができた。

(2) 今後の課題

- 児童によっては視点に沿った十分に交流ができていなかった。交流をさらに活性化するために、児童が交流の視点を明確に意識することのできるような言葉かけや発問の仕方等といった指導者の働きかけを吟味していく必要がある。
- 他教科の年間指導計画や学校行事を見直し、カリキュラム・マネジメントを実現していくことで、さらに書く場を広げていき、児童の書く力を高めるとともに、書くことのよさを味わい、学びに向かう力を高めていけるようにする。